

防災・空き家対策・里山保全でチーム作り

岡山県浅口市 くにとうの御船を守る会

1. はじめに

岡山県南西部に位置する浅口市は、2006年3月21日に金光町、鴨方町、寄島町が合併して誕生した。人口は、3万2810人で、5年前の国勢調査と比較し、1425人、4.16%の減少となった。

くにとうの御船を守る会の活動拠点である国頭地区は、浅口市中心部から離れた海沿いの寄島町に位置し、基幹的な交通軸とは少々距離を有している。そのため浅口市を構成するほかの地域に比べ、人口減少・少子高齢化が進んでおり、高齢化率は2021年5月末現在、浅口市全体で36.7%、寄島町41.8%、国頭地区は47%となっている。

2. 国頭地区のまちづくりの体制の特徴と課題

国頭地区のまちづくりは、分館長を頂点に、それを補佐する副分館長、その下に東西の国頭地区の総代を始め、消防団や子供会、愛育委員や民生委員などの各種行政協力委員、その他老人クラブ等の代表者らなど、地区内の様々な団体と、そこに事務局を加えた体制で取り組まれている。

この事務局制度の狙いは、企画などの組織運営に係る事務作業を事務局負担にすることで、地区代表ほか役員の負担を軽減し、地域内連絡体制を一本化し、組織運営の継承と世代間のコミュニケーションを円滑にすることにある。2004年の台風16号により、寄島



町の海沿いの地区、特に地盤が低い国頭地区が高潮による大きな被害を受けた際にも、地区内の連携の調整などの点で効果を発揮した。被災を機に国頭地区では、2009年に自主防災組織を設立し、防災マップ作り、土砂災害時の避難訓練、不要家屋（空き家）調査などにその活動を広げていく。

このように活発なまちづくり活動が行われる国頭地区ではあったが、この頃から、若年層の減少・流出が著しいことによる空き家の増加と、地域活動の担い手不足を懸念する声が聞こえるようになっていた。

3. 空き家対策活動の本格化と外部との連携の開始

2015年度、地区の自主防災活動の一環で防災マップの作成に取り組んだ際、地区内の空き家調査が行われ、地区内に40軒以上と想像以上の空き家の数が確認された。そこで2016年度、空き家の増加と若者の減少を改善し、地区の活性化・定住人口の増加に繋げることを目的に、地区住民有志で空き家対策部会を立ち上げ、空き家の利活用に着手した。その取り組みが岡山県備中県民局の協働事業「人づくり・地域づくり応援隊事業」に採択され、県内大学生12名と共に、空き家の



未来デッサン事業 イベント状況

利活用について検討が行われた。空き家を住まいとしての活用に限らない利活用も提案され、ヨソモノ・ワカモノ視線を活かした外部人材との連携効果が生まれた。

2017年度には、空き家対策部会の取り組みも活発化、その名称も新たに住民から公募した「くにとうの御船を守る会」とした。取り組みは浅口市の市民提案型協働事業に採択され、浅口市と県内の大学生と、数度の清掃活動を通じて、地区内の3軒の空き家を再生させた。そしてその物件を利活用して、寄島町最大のイベント「寄島牡蠣祭り」に併せ、イベント「空き家活用まちづくりプロジェクト」を企画・運営し、多くの動員と意見収集に成功した。このことで、住民有志で始めた空き家の利活用の取り組みが、一定の成果として地域内外で認識されることとなった。翌2018年度も、浅口市の市民提案型協働事業に採択され、再生させた空き家が、公会堂などの既存の公共施設よりアクセスが良いことを活かし、敬老会や地域づくりの講演会の開催など、国頭地区住民に空き家利活用の効果や意義を感じてもらえる機会を創出した。

4. 行政と協働での空き家対策の推進と、里山保全の取り組みへの着手

2019年度からは、地域主体で移住相談

に対応できる体制づくりに着手した。地域内の空き家情報等を集約したカルテ作成の取り組みの他、空き家の所有者からの管理相談等にも対応できるよう、有償の管理サービスを立ち上げる準備も併せて進められた。それらの方針を浅口市の空き家対策担当課と共有し、国頭地区「お家探しプロジェクト」として、市内の地域づくりの活動事例として共同発表を実施。行政と課題対策の目線合わせが行えたことで、国頭地区の空き家利活用の取り組みは、協働の体制の強化に成功した。2020年度には、浅口市の空き家対策担当課との定例会議を開始。活動方針や目標の共有と、その進捗などの定期的な情報交換を行うことで、地域外所有物件の空き家バンクへの登録や、市と地域共有の課題解決に繋がる事業計画の立案など、地区内の空き家の利活用を進める上での着実な成果が生まれた。

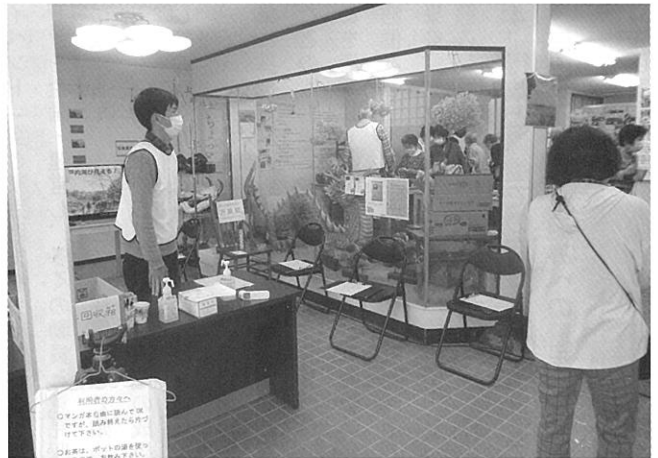
また、国頭地区の耕作放棄地整備や里山保全の活動がこの頃から本格化する。空き家への移住者獲得を国頭地区の景観的魅力づくりの点からも推進できるよう、御船を守る会のメンバーに加え、コロナ禍により活動が減少していた地元青年団と連携し、地区内の課題となっていた耕作放棄地を再生させるのアジサイ園づくり及び体験農園づくりや、竹やぶに埋もれていた戦前からの生活道路を再生させた、トレッキングコースの整備に取り組んだ。

この里山保全の取り組みについては、浅口市の担当課と協議し、活動費の補助を受ける形で、協働で実施している。これらの取り組みをさらに多くの方と共有する場として、1月には再生させていた空き家のうち1軒を、「ちよつと寄つてえ家」としてオープン。トレッキングコースやアジサイ園の紹介の他、地区住民の憩いの場として開放した他、地区でとれた農産物の簡易販売所としての機能も持たせた。

2021年度は、民間の助成金を得て、空き家を住民の集いの場として活用している事例の視察や、定住促進担当課も加えた定例会議に取り組んでいる。里山保全の取り組みでは、アジサイ園・体験農園の管理運営の他、



里山整備状況



空き家利活用 朝市開催

整備を行った竜王山トレッキングコースを活用しての地元小・中学校の交流学習運営支援などに取り組んでいる。寄島竜王山のトレッキングコースは新聞社、ケーブルテレビなどのメディアでも取り上げられ、地区への訪問者が増加している。国頭地区に関心を持ってもらえているとともに、くにとoughの御船を守る会への注目も高まっている。

5. 成果のポイントについて

くにとoughの御船を守る会が、空き家対策

の取り組みを進める際に参考にしたのが、2017年度に国頭地区の中学生以上を対象に実施した、全住民アンケートの結果である。そのように地区住民の声を確認・可視化・共有し、声をもとに活動した成果なども報告するなどして、主体形成を丁寧にする。また、活動を継続的なものにしていく。また、公募した結果であるとのことだが、地区住民の誇りである、地元神社の大祭時に巡行する「御船」を名に冠したことが、地区住民が「わがまちのこと」として、くにとoughの御船を守る会の取り組みに関心を持たせている。

そうした地区内への働きかけとは別に、外部人材として地域おこし協力隊、県内大学生、県、市、地域支援員といった様々な立場の協力を得る機会をうまく活用し、それぞれの提案も柔軟に受け入れることで、取り組みをより重層的に進めている。

その他、あえて任意団体で地域課題の解決に取り組んでいることも大きい。自治会の体制の延長で取り組んでいた場合、どうしても任期、改選などがあり、一貫した活動方針などを描きにくいところ、任意団体として活動することで、人脈や経験の蓄積、自主財源の確保など、活動を戦略的に進める上で必要な要件の確保に繋がっている。

(くにとoughの御船を守る会代表 笠原宏之)